

母ちゃん、タカシが死んだノモンハンだよ

千田 優子

大正4年生まれ之母は82歳で、亡くなった。穏やかな死に顔だった。一番大変な時に育て、一番愛した長男を病院のベッドで待っていた気がして。「母ちゃん、兄貴は忙しくて来れないって。待ってても無駄だよ……。ごめんね」（兄夫婦は山形の鶴岡に住んでいる。母が70の時、松戸で私たち家族と同居を始めた）

そう耳元でささやくと、ツーと一滴の涙を流し、1時間後に息をひきとった。騒がせすぎた割りには……。何と穏やかで、清しく仏になったことか！

およそ3年の間、寝たきり・徘徊・被害妄想・惚け。歳とればどの道も通るすべての経過を辿って、母は逝った。激しく、壮絶に、派手に……。「娘に焼き殺される」「年金を盗られる」「髪をつかんで廊下を引きずって怪我させた」警官が来た事2度。弁護士に頼んだこと1度。その他モロモロ……。

そして、入院のちょっと前までは……。時々すっかり娘時代に戻る”まだらボケ”であった。「ゆうこ、TVにタカシと似た人が出てる！」「このオーバー買ってきたよ」何と……。真っ赤で黒い毛皮の襟つき。

「タカシ」はお医者さんだった。「タカシ」は母の許婚だった。「タカシ」はノモンハンで死んだ。本当はお医者さんの奥さんになるはずだったのに！ 本当は「タカシ」のお嫁さんになるはずだったのに！ 私がもの心ついた時から、そう教えられた。

何度も写真を見せられた。夫婦ケンカして家出する時、タカシの写真も切り取っていた。私のダンナに最初に見せた写真がタカシだった。

死んだ青い鳥を追いかけ続ける母……。という訳で、私は昔お嬢様のままの母を好きでなく、深くは考えたことなかった。

両親が死んで、10年以上たって、自分が還暦を過ぎて、一人になる時間が多くなって……。そして”富士国際”の新聞で「ノモンハン」という地名を見た時、突然に母のことを考えた。

ノモンハン……。タカシが死んだところ。ソ連の戦車が一杯出た、近代戦だったというところ。母が生きていたら、最期に娘に戻った母だったら……。きっと行きたかったに違いない。

思えば、満鉄勤務の父と暮らした大連、二人の兄が生まれた大連も、父母が生きてる間に行こうと考えたことなかったっけ。引き上げ後のことの苦労話はいっぱい聞いてたけど……。満州」での話しは聞いたことがなかった。

そして、大連の防空壕で生まれた兄と「満州」の大連に行ったのは、ほんの数年前。レンガ住宅の並ぶ大連の街並みに房をたれるライラック（リラ）を発見した時、「リラの花が咲いてきたねえ。この花好きだよ」と母は良く言っていたっけ。あれはこの風景をなつかしさがってんだ。

あの戦争最中に子どもを生んで、育てること。着のみ着のまま引き上げてきた両親の世代のこと。私はどのくらい知っていたのだろうか？ どのくらい考えただろうか？ 母の底の

底の思いを・・・振り返ったことがあっただろうか？

五味川純平の本を読んだ。辻正信の本を読んだ。（この本は吐き気がして途中で止めた）こんな理不尽なことで。こんな不条理なことが。戦争を指揮した人がのうのうと暮らす？「鴻毛より軽い人の命＝肉弾戦」「現地調達」（食料から陣地から）「虜囚になるより死ね」そして、それが15年戦争の最期までの日本軍（皇軍）の真髓だった。

そして、知った。タカシだけではなく、理不尽な死を迎えた兵隊たちのこと。兵隊ばかりでなく、満蒙開拓団の4千人を超える人たちの最期。集団自決。お墓をつくってくれた新生中国。一人ぼっちになった養父母への感謝の墓。米どころ庄内平野よりもっと整然とした田んぼ。これは70歳の岩手の人の技術指導によるもの。（すごいこと。日本のノー政に頭に來たに違いない！）

帰ってきて、仏壇に母の写真を返し、そして、私は、とても素直な気持ちで、母に言えた。「母ちゃん、タカシに会いに行きな。タカシの傍に行きな。父ちゃんはこの世で苦勞かけたからね。父ちゃん？ 大丈夫。一番可愛がられた私が納得させるさ！」

戦争さえなければ・・・一人ひとりに違った人生があった。（その前に私が産まれていない、ということか！！）

まあ、でも、こうやって死んだ許婚と一緒にになって娘に承認された母は・・・あの世で、やっばお前を産んで良かったって・・・大人になった娘を褒めてくれてる気がする。

（ちだ・ゆうこ：山形県鶴岡市出身。現在、千葉県松戸市在住。知的障害者ホーム運営を経て、余暇支援・ふれあいの場「はいビスカス」代表）